

人が“自己存在の意味を問う”とは何か

ースピリチュアリティの視点から考えるー

○ 大分県立看護科学大学 稗田 朋子 (9416)

〔キーワード〕スピリチュアリティ、自己存在の意味を問う、人生の語り

1. 研究目的

本研究は、自己存在の意味を問うようなトラウマ体験や苦しみの表明を公にしていない人の人生の歩みに焦点を当て、「人が“自己存在の意味を問う”とは何か」についてスピリチュアリティの視点から明らかにすることを目的とする。

スピリチュアリティは人が生きることに向き合う時に重要な概念である(藤井, 2015)。発表者は、ホスピスケアと自殺防止の現場での経験を通して、人が苦しみの中で自己存在の意味を問っている姿はもちろんのこと、そのことを内に秘めて社会生活を営み続けている方がその真情を吐露する様子を目の当たりにしてきた。そのような方々との出会いは、“特別な危機的状況に直面したこともなく、やりがいのある仕事を手に入れ、健康で生活面も安定しているにも関わらず、自己存在の意味を問うてきた”発表者の状況と重なった。そのような経緯から、自分と同じような経験をしている人が多数存在するのではないか、そうであるならば自己存在の意味を問うた経験のある人はどのような人生を歩んでいるのか、更に、自己存在の意味を問うことで何かを見出すのだろうかという問いが生まれた。

2. 研究の視点および方法

スピリチュアリティは一人称の主観的領域(藤井, 2015)である。従って、「人が“自己存在の意味を問う”」という一人称の主観的世界観を理解するためには、スピリチュアリティの視点でしか理解できないと発表者は考える。本研究はそれを踏まえて、以下の3点を研究の軸に据える。トラウマ体験や苦しみの表明を公にしていない人を対象に、1) ライフ・イベントではなく人生のコンテクストから“自己存在の意味を問う”ことを捉える、2) “自己存在の意味を問う”た歩みに着目し、そのプロセスを明らかにする、3) 当事者の主観に立脚した人生の語りを対象者と調査者の対話形式で生成する。

また、本研究のデザインは、帰納的調査パラダイムに立脚し、直接インタビューに基づく質的データを用いた探索的研究である。目的적サンプリングにより3名の対象者を選定し、ライフ・ヒストリー研究の手法を用いて“自己存在の意味を問う”という経験を捉えると同時に、アクティブ・インタビュー論の視点から相互行為の中でその問いに迫った。

データ分析について、まず分析1では、3名の語りの逐語記録を基に、「“自己存在の意味を問う”た人生の歩み」に関する文書セグメント及びその要約を作成した。それを時系列に分類し、意味を問う行為やスピリチュアルな気づき等、スピリチュアリティの視点でコーディングした。最終的に、それぞれの“自己存在の意味を問う”た歩みをスピリチュ

アリティの視点でストーリー化した。次に分析2では、人生というコンテキストから離れ、分析1で導いた3名のコード及びストーリーを比較検討し、「人が“自己存在の意味を問う”とは何か」についてスピリチュアリティの視点で捉え、共通性や異質性を示した。

3. 倫理的配慮

本研究は、関西学院大学『人を対象とする行動学系研究倫理委員会』の承認のもと(No. 2017-30)、本学会の研究倫理指針を遵守している。調査目的と意義、調査の協力や中断・中止の任意性、個人情報保護等について、対象者に口頭及び文書で説明し、同意を得た上で調査を実施した。更に、調査過程において、対象者の心身の状態への配慮を行った。

4. 研究結果

分析1より、全員が人生の歩みの中で“自己存在の意味を問う”た経験をしており、意味を問うプロセスやその中でスピリチュアルな気づきを得ていることが明らかとなった。

分析2では、①自分を疑い、とらわれに気づく、②自分を手放していく、③人間を越えるものからメッセージを受け取る、というプロセスに関する共通点が示された。また、本研究の問いの中心である「人が“自己存在の意味を問う”」とは、“自分を手放すというスピリチュアルな旅”であること、それは決して特別なことではないということが見出された。人は自分を手放していく過程の中で、①“自分”という存在から“人間”へと視野を広げる、つまり全体性に発展していく。また、②その歩みの中で合理的世界観と非合理的世界観を行き来し、存在そのものの尊さを受け取る。更に③その先にある何かを受け取ろうとしている。しかし、本研究の結果から“その先にある何か”を明確に捉えることはできなかった。これは“自己存在の意味を問う”という形而上的な問いに対して、科学的視点だけでその答えを出すことへの限界と解釈する。

5. 考察

3名の人生の語りから、スピリチュアリティ及び“自己存在の意味を問う”ことの普遍性が示された。それを踏まえて、スピリチュアリティの支援の在り方について提言する。

“自己存在の意味を問う”対象者がその歩みの中で新たな意味を受け取るためには、援助者のコンパッションと寄り添いが必要と考える。特に寄り添いは、「苦しむ人を前にしてどう在るかという援助者の価値観が問われること」や、「苦しむ人を前にして何もできないという限界を認め、なおそこにとどまること」を意味する(藤井, 2015)。

更に、スピリチュアリティという一人称の主観的世界観を語る対象者に対して、「何も求めずに聴く」、「スピリチュアリティの視点(非合理的及び自己超越的世界観)で彼らの世界を理解する」という態度の重要性も示された。これは対象者のスピリチュアリティを敏感に感受すること、つまり「Spiritually-Sensitive」という態度と関連していると考えられる。

今後は「Spiritually-Sensitive」という態度の検討を研究課題とし、スピリチュアリティの支援の在り方を更に深めていく。

(引用文献) 藤井美和(2015)『死生学とQOL』関西学院大学出版会。